

【シンポジウム】

旅、歴史、ポエジー：場所と時間をつなぐもの
Voyage, Histoire, Poésie

趣旨と概要 Introduction

コーディネーター：関 未玲
SEKI Mirei

全国大会においてこれまで包括的には取り上げられてこなかった「旅」を今年度の主要テーマとした本シンポジウムでは、3名のパネリストに観光的・文学的・地理学的・歴史学的な見地からご発表いただき、ケベック研究の新たな視野を開拓する試みがなされた。各報告については後続頁に詳しいが、ここでは概略について紹介したい。

羽生敦子会員からは「航海者シャンプランを育んだ土地とケベックへの夢」と題した発表のもと、1608年にケベックに要塞基地を建設し、フランスが北米に進出する礎を築いた航海者サミュエル・ド・シャンプランについて、観光的な視野も入れながらお話しいただいた。シャンプランは1567年（1570年とする資料もあり）8月13日にフランスのブルージュで生まれたが、ブルージュはラ・ロッシュェルから30キロメートルほど南に位置し、16世紀に都市整備が行われた港湾都市であった。現在では海が後退し陸地になってしまったために港としての役割が果たせず、陸の孤島と表現されるほどにまで衰退してしまったが、シャンプランの存命中はフランスで最大の港のひとつであった。タラ漁や塩産業でも繁栄し、バスク、ポルトガル、オランダ、北欧等の外国船が日々往来していたこの都市は、20の言葉が話されるバベルのような多言語都市であったようだ。その繁栄の時代にブルージュで生まれたシャンプランが、宗教戦争によって血で血を洗う悲劇の舞台へと街が無残にも変わってゆく姿を見て心を痛め、さらにはスペイン領アメリカでの過酷な黒人奴隷の労働条件を目の当たりにし、フランスの北米進出に彼なりの理想郷を見出そうと努めたことは想像に難くない。新天地での心洗われる雄大な自然に魅せられたシャンプランは、理想郷のような都市の建設をケベッ

ク要塞に託し、また少なくとも彼自身は新大陸とフランスをつなぐ公平な交易を築こうとしていたと考えられる。ケベックの大地がいかにシャンプランの心を捉えたのか、その魅力についてシャンプランの足取りを辿るように、羽生会員から図や資料を交えて説明がなされた。そして最後にシャンプランの足跡をフランスのラ・ロッシュの地に見出し、フランスとケベックをつなぐ発表をしていただいた。

特別ゲストの石橋正孝氏からは「ジュール・ヴェルヌとナイアガラ瀑布」というタイトルで、地理学的小説を描き続けた作家ジュール・ヴェルヌとナイアガラの滝との特異なかかわりについて、ヴェルヌの興味深い創作方法なども紹介いただきながらお話しいただいた。『八十日間世界一周』『海底二万里』『地底旅行』等で知られる19世紀フランスの作家ジュール・ヴェルヌ(1828～1905)は、世界中を舞台とする地理学的小説連作〈驚異の旅〉の執筆に半生を捧げ、シリーズ構成作品の多くで、自ら足を運んだことのない土地を舞台に描いている。地理学雑誌を中心に同時代の多くの資料から抜粋したと言われる情報を、石橋氏の言葉を借りれば、「パッチワーク」する手法が取られ、これらのメモは作品に使用されるたびに該当箇所にも抹消線が引かれ、未使用箇所がなくなると破棄されていたという。同様に、ある作品で取り上げられた土地は、手元の地球儀に印が書き入れられ、原則としてその後二度と作品に登場することはなかった。超現実的な世界を描くSF作家の、その地道な現実的執筆工程を知るのは、何とも興味深い。報告者によればナイアガラの滝だけは、このようなヴェルヌのスタイルのなかで二重に例外的な存在であった。第一にヴェルヌは実際にナイアガラの滝を訪れたことがあり、第二に5作もの作品の中で登場人物たちに瀑布を訪れさせているからである。すでに1792年に、遠い縁者であるというシャトーブリアンがナイアガラの滝を訪れ、旅行記を発表していたが、実際にこの瀑布を前にしてヴェルヌはヨーロッパにはない「自然の驚異」と対面し、人工物の無力さを痛感したと言う。

すさまじい爆音とともに大量の水を吐き出すナイアガラの迫力について、いかなる芸術家といえども表現不可能だと語り、シャトーブリアンの描写でさえナイアガラを捉えることができていないとヴェルヌは暗に指摘する。ナイアガラのエネルギーを文学的に汲み尽くすために、彼自身5回にわたり、自作のなかで描き続けるほかなかった。ヴェルヌ作品を文学的に再評価した最初の批評家の一人でもあったビュートルは、『毎秒681万リットルの水』と題した小説を自らも上梓し、変幻するナイアガラの姿を紹介している。旧大

陸にはないスケールを持つ自然の驚異が仏作家たちを魅了し、フランス文学の系譜のなかでエクリチュールへと変換されていった様を、石橋氏の報告によって迎えることができた。

最後のゲスト登壇者は詩人としても活躍されている管啓次郎氏に、「旅を書くことを学ぶ」というタイトルで発表いただいた。旅を詩へと再創造する管氏の詩作方法は、日常から異空間へと身を置き換える旅そのもののプロセスでもある。現実とその似姿として記述された旅とのあいだにある乖離を調節しながら、旅行記を執筆する自身の経験について触れ、「旅を書く」ことが旅そのものとなる瞬間についてお話しいただいた。

旅が出現させる非日常の時空は、日常を遮断させるだけでなく、この日常に身を置く私たちの自己輪郭をも揺さぶる。1984年から翌年にかけて管氏が巡ったブラジルからカリブ海にいたる旅は、滞在記『コロンブスの犬』(1989)として活字化されており、この滞在の間ずっと手元に置いていたのがジル・ラプージュの本 *Equinoxiales* (1977、邦題『赤道地帯』) であったという。『赤道地帯』はノンフィクションとして初めてゴンクール賞の候補作品となった、旅行記とも、あるいは小説ともとれる不思議な書物である。管氏はこのブラジル旅行記が、現実と幻想のあいだをつねに問い直しつつ進まなくてはならない(旅の記述)の性格をよく意識した作品であると指摘する。そして自らも、ブラジル旅行を続けるなかで同時並行的にラプージュを訳しつつ、『コロンブスの犬』というブラジル旅行記を上梓している。

旅は無限の異空間を提供するように思われるが、管氏は旅を書くことは旅の限界をあらわにすることだという。そしてこの限界を通して、自己の輪郭が確定されるとも指摘する。旅と書くことが同じ時間のなかで共有されたときにはじめて、記述への接近が可能となるのかもしれない、という氏の言葉は説得力に富み、しばし旅行記を読み終えた読後感に似た感覚が私たちにも残る。最後に管氏自ら、詩の朗読を披露していただいた。

旅行者は旅をその都度ごとに1回性のものとして体験するが、この体験が記述され、書き換えられていくことで、旅は時空を超えた交信の場を生み出す。旅が新天地開拓の探検であった17世紀、ジュール・ヴェルヌがSF/旅行文学を花開かせた19世紀、そして世界の横断という極めて現代的な旅の在り方とおして、俯瞰的な視野から「旅」をめぐる議論は続き、会場からも次々と質問が続いた。旅路から帰宅してもすぐには日常生活へと落ち着くことができないように、余韻をわずかばかりでも引き伸ばしたいという会場の相違

のなかで、時間を駆け巡るシンポジウムは、質疑応答の白熱した議論がやまなかった。

(せき みれい 立教大学准教授)

【シンポジウム】

旅、歴史、ポエジー：場所と時間をつなぐもの
Voyage, Histoire, Poésie

航海者シャンプランを育んだ土地とケベックへの夢
Les lieux marquants du navigateur Champlain et
son rêve de fonder la ville de Québec

羽生 敦子
HANYU Atsuko

Nouvelle France の開拓者といえばジャック・カルチエ（1541-57）がまず想起されるであろう。そのカルチエの最後の旅（1542）から約 70 年の後、フランスは（アンリ 4 世の治世）北米のフランス植民地建設、また中国への北西航路を見つけるといふ夢に再び挑むことになった。その夢に挑み、ケベック市を建設したのがサミュエル・ド・シャンプラン（1567, 1570-1635）である。

カルチエと同様に、シャンプランに関しては資料が少ない。今回の報告には David Hackette Fischer 著 *Le Rêve de Champlain*、Jean-Michel Demetz 著 *Champlain* の 2 つの伝記を参照する。また、報告最後には 2019 年 8 月の La Rochelle における現地調査で明らかになったケベックとラ・ロッシュェルについて、ラ・ロッシュェル市発行の小冊子 *Chemin du Québec* と報告者が撮影した写真をもとに紹介する。

前出した二人の作者の記述にはシャンプランへの個人的な思いが多くみられる。資料が少ないうえ、1970 年代、80 年代の歴史見直しの動きによって、発見者（*Découvreur*）とよばれていた征服者たちの存在が教科書等で扱われなくなったこともあり、フランスではシャンプランの名前を知らない人も多い。「失った植民地」への歴史が欠如していたことも事実であろう。一方、ケベック側では、ケベック市建設 450 周年あたりから新歴史民俗学からのアプローチによりシャンプランとアメリンディアンの関係性の再解釈が行われているようである。

今回の報告では、シャンプランのケベックでの業績というよりも、シャンプランがなぜケベックを目指すに至ったのか、フランスのシャンプランを中

心に話を進めた。

1. シャンプランの生まれた場所について

シャンプランは、サントンジュ地方のブルアージュで 1567 (1570 ?) 年に生まれた。16 世紀のブルアージュは大西洋岸で繁栄した大きな港のひとつであった。とりわけ上質な塩は有名であり、西洋の交易の中心地のひとつであった。石の家が立ち並び、海辺では製塩場が広がっていた。20 もの言葉が聞こえる国際都市であった。

現在では、海の後退により内陸の町へと変化している。とは言え 16 世紀に土地整備が行われた遺構のまちは、2017 年「フランスの美しい村」のひとつにも選出されている。シャシャンプランの生家を見ることができる。観光案内所作成の冊子では、塩の町、シャンプラン、Nouvelle-France と「海」に開かれた場所であったことや、ブルボン王家との関係がキーワードとして説明されている。

2. シャンプランの時代背景について

まちの繁栄に反するようだが、シャンプランの生きた時代は「宗教戦争」が跋扈していた。カトリックの町であったブルアージュは改宗を繰り返した。その上、伝染病や飢餓にも見舞われる。シャンプランの洗礼の証明書は見つからないが、おそらく、サミュエルという名前からもプロテスタントであったようだ。2012 年、ラ・ロッシェルの聖ヨン教会でプロテスタントとして洗礼をうけたシャンプランの証明書が発見されている¹。

3. 兵士としてのシャンプラン

1594 年ブルターニュの (宗教) 戦争に従事中、北米大陸経験者たちと出会い、北米への探検に関心を抱きはじめる。戦後、閑暇な日々を送っていたが、1598 年に叔父の船に乗り込みスペインのカディス、セビリアなどの都市に滞在した。スペインの海軍に雇用され、地図製作、航海術を学び、アンティル諸島へと航海する。先住民たちの暮らしについてスケッチを残す一方、スペイン人入植者たちの黒人奴隷に対する残酷な対応に衝撃を受ける。その独裁的で残虐な統治の仕方は宗教戦争中の体験を髣髴とさせるものであった。Fischer は、文化の多様性のなかに育ったシャンプランにとって、この経験が Nouvelle-France における彼の夢²、アメリンディアンとヨーロッパ人が平

和に共存する国の建設という発想をもたらした、と言及する。(Fischer, 2011 : 115)

4. シャンプランとアンリ 4 世

アンリ 4 世はブルボン家出身初の王であり、とりわけナントの勅令を發布したことで有名である。Fisher は一つの宗教にとらわれない人物と表現しているが、シャンプランにも共通する事であろう。シュリー侯爵 (1560-1641) の反対もあり財政的にも困難であったが、Nouvelle-France の植民地化を奨励した王であった。

彼はシャンプランを重用したが、二人の関係性には不思議な点が多い。シャンプランは、亡くなる数年前に、「*Obligé de naissance envers le roi*」と謎めいた一文を残している。彼はアンリ 4 世の嫡子なのだろうか。Fischer はその可能性について示唆するが確証があるわけではない。

5. Nouvelle-France への夢

アンリ 4 世、ディエップなどの商人の援助を受け 1603 年 3 月初旬、ピエール・デュガ、シュール・ドゥ・モンをキャプテンとして、フランソワ・グラベ、前回カナダから連れてきた二人のアメリンディアン、シャンプランを乗せた *La Bonne Renommé* 号がオンフルールから出発する。目的は商売と Nouvelle-France の拠点づくり、換言すれば、アメリンディアンとの信頼関係の構築であった。この旅がそれ以後展開されるケベックのシャンプランの第一歩であった。

おわりに：ラ・ロッシュェルとケベック

Chemin de Québec の文章と撮影した写真から 17 世紀、多くのフランス人がラ・ロッシュェルからケベックへと旅立った事実について紹介し発表を終了とした。

(はにゆう あつこ 立教大学)

注

- 1 なぜ、ブルアーージュから 50 キロも離れた教会なのかなど議論がある。シャンプランに関してはケベックの墓の場所についても研究の対象となっているほどに、謎の多い人物である。

- 2 L'idée nouvelle d'un empire où Indiens et Européens pourraient vivre ensemble dans un esprit différent (Fischer, 2011 : 115)

主な参考文献

David Hackett Fischer (2011) *Le Rêve de Champlain*, Québec, Boréal, 995p.

Jean-Michel Demetz(2018) *Champlain*, Paris, Tallandier, 142p.

ラ・ロッシュェル市作成の小冊子

Chemin de Québec sur les traces de la Nouvelle-France, les lieux de mémoires canadiens à La Rochelle

【シンポジウム】

旅、歴史、ポエジー：場所と時間をつなぐもの
Voyage, Histoire, Poésie

ジュール・ヴェルヌとナイアガラ瀑布
Les Chutes du Niagara chez Jules Verne

石橋 正孝
ISHIBASHI Masataka

1867年3月26日、ジュール・ヴェルヌは、弟のポールとともに、当時世界最大の蒸気船であったグレート・イースタン号に乗り、リヴァプールをあとにする。大西洋を2週間かけて横断する船旅ののち、ヴェルヌ兄弟がニューヨークに到着したのは4月9日のことだった。ヴェルヌにとって最初で最後となるアメリカ滞在はわずか8日間で切り上げられる。文字通り駆け足で行われたこのアメリカ旅行には、あたかもそれがごく当然のことであるかのごとく、ナイアガラの滝訪問が含まれていた。ヴェルヌは旅の間に詳細なメモを取っており、そもその始めから自らの見聞を小説に仕立てる心づもりがあったとおぼしい。事実、帰国から2年後の1869年夏、グレート・イースタン号を舞台とする小説の執筆が始まる。こうして完成した作品が『浮かぶ都市』であり、メロドラマ的な筋立てを持つこの小説の大部分はグレート・イースタン号上で展開するが、最後のクライマックスはナイアガラの滝に設定されている。

現実のヴェルヌに話を戻せば、彼がナイアガラの滝に向かった理由として、遠い親戚でもあったシャトーブリアンの影響がまったくなかったとは考えづらい。ことあるごとに『キリスト教精髓』の作者やヴィクトール・ユゴーの名を引き合いに出さずにはいられない作者が、小説のこの場面では、尊敬する大作家のことを珍しく失念しているように見え、そして主人公たちがナイアガラの滝を訪れるわけを説明の不要な自明の事柄として扱っているとすれば、それは、ヨーロッパにはない「自然の驚異」として、グレート・イースタン号という「人工の驚異」と対比されるからだとしか考えられない。ところが、滝の迫力に関しては、いかなる芸術家といえども表現不可能だ、とい

うヴェルヌお決まりの文句で逃げが打たれ、あのシャトーブリアンの描写ですら滝は捉えられていないことが暗に示される。要するにヴェルヌは、自然に対する言語の、ということは人工物の無力を認めることによって、ナイアガラの滝をめぐる自らの記述が現実のナイアガラのエネルギーによりかかり、それに賦活されることをひそかに期待しているかのようにも読める。

こうして最初に本格的にヴェルヌ作品に登場したナイアガラの滝は、この後さらに4作の作品において「リサイクル」されることになる。「リサイクル」というのは文字通りの意味であり、なぜならば、ヴェルヌは『浮かぶ都市』においてナイアガラの滝を描写するのに用いた語彙や表現のうち、必要最低限の部分のみ取り出し、物語の展開の上で滝の登場が必要な場面で再利用するに留め、新しい情報はほぼ一切付け加えていないからだ。これは〈驚異の旅〉において極めて異例の事態に属する。ヴェルヌは、1872年に発表した『八十日間世界一周』以後、〈驚異の旅〉という連作を通じて自覚的に地球全体の描写を企てることになり、あるインタビューで本人が語るところによれば、地球上のある地域を、他者による言説を用いることで小説の舞台として描くたびに、地球儀の該当箇所に印を付け、その場所を二度とふたたび描かないようにしていた。にもかかわらず、ナイアガラの滝が繰り返し登場するのはなぜか。

『浮かぶ都市』では、ナイアガラはそれ自体として、あくまで描写の対象として現れたとすれば、そうして言語に変換された滝がいわば一時的なアルシーヴに収められ、他者による言説の抜き書きの場合とは異なり、複数の目的のために再利用されたのではないか。まず『征服者ロビュール』では、英米間のナショナリスティックな対立の決着がナイアガラという境界線上で図られる場面で幕を開け、ナイアガラ瀑布の発電で巨万の富を得た気球主義者が、ロビュールなる謎の人物の指揮する空気より重い飛行機械に拉致され、その機械の優秀さを示す最初のデモンストレーションがナイアガラ上空を下流から上流に向かって飛ぶことであり、『名を捨てた家族』が、ヒーローとヒロインを炎に包まれた船とともにナイアガラに突き落とす。大富豪の遺産をめぐるアメリカの各州を升目とする鷺鳥ゲームが繰り返される『ある変人の遺書』では、ありきたりの観光地となったこの場所が散々けなされたかと思いきや、ヴェルヌの事実上最後の作品となった『世界の支配者』で再登場したロビュールは、その最新の機械を操縦する過程で、自動車として地上を走り、潜水艦として水中に潜り、船としてエリー湖の湖面を走ったあと、

あわや滝に呑み込まれるという刹那に羽ばたき飛行機に変形させ、かつてとは反対の方向へ飛び出していく。このように見てくると、ヴェルヌが現実に見の前にしたナイアガラから受けた圧倒的なエネルギーの印象が強大だったあまり、一度の物語的利用だけでは使い果たせなかったのだ、と断言したくなる誘惑に駆られざるをえない。

(いしばし まさたか 立教大学准教授)

旅、歴史、ポエジー：場所と時間をつなぐもの
Voyage, Histoire, Poésie

旅を書くことを学ぶ
Acheminement vers l'écriture du voyage

管 啓次郎
SUGA Keijiro

旅を書くことについての関心をもったのと自分ひとりで旅をするようになったのは、たぶん同時期だったろう。それ以前に、旅を読むことへの関心があったはずだが、読んだ旅は旅には似ていなくて、読まれ知識となった土地はどこも紙に描かれた背景画のようだった。しかし、人は誰も自分ひとりで効果的な文体にたどりつくことはできない。先行者が必要だ。1984年から翌年にかけて、ぼくはブラジルからカリブ海にいたる土地をひとりで旅行して過ごした。その間ずっと手元にもっていたのがジル・ラプージュの本 *Equinoxiales* (1977) だった。それは彼のブラジル旅行記だが、現実と幻想のあいだをつねに問い直しつつ進まなくてはならない〈旅の記述〉の性格を、よく意識している。ぼくはその本に学びつつ、その本を訳しつつ、自分自身のブラジル旅行記を書いた。旅を書くことは旅の限界をあらわにし、自己の輪郭を確定する。そんな記述への接近を、個人的な体験として語ってみたい。

ダニー・ラフェリエールはこう書いていた。『書くこと 生きること』（小倉和子訳）から。「ぼくはマイアミにいる、ということは、どこにもいないということだ。（……）マイアミは郊外のようなものなんだ。そう、ぼくはマイアミ、すなわちポルトープランスとモンレアルの郊外に住んでいるんだ。」それぞれの土地に住むハイチ人コミュニティの相互関係を考えると、これはただ事実を述べているだけなのかもしれない。しかしこの3つの都市は、作家のこのひとことで改めてあざやかにむすばれ、それを耳にした者は、物理的な距離を超えて土地と土地が並び合った風景を一瞬にせよ想像する。あるひとりの人間の中でのみ成立する、異なった土地の並列による奇妙な地理学の

ことを、ぼくは「ストレンジオグラフィ」と呼んできた。マイアミに焦点を合わせ、そこを遠く離れた2つの大都市の「郊外」と呼ぶ小説家のストレンジオグラフィは、彼の作品世界に入ってゆくための良い入口でもあるだろう。

小説家に限らず、誰もがその人ならではのストレンジオグラフィを生きている。土地の並びと現実の場所の記憶を根拠として、世界を自分なりに理解し、そこから世界をさらに想像している。あらゆる旅行記には、その旅行記だけに見られる土地の名の並び方があるが、誰しも長く生きていれば、並び合う土地の名の数はどんどん増殖してゆくだろう。旅行とはそんな増殖の速度が極端に加速される機会、隣り合う名前と名前の集中ぶりがいっそう密接になる機会だ。時間的尺度のちがいというか、全体を見渡したときの解像度のちがいというか、あらゆる人間の生涯は別の縮尺をもって見るとき、まるで旅のように見えてくることがある。「人生は旅だ」という感慨は、ことさらにいわれなくともわれわれ全員が共有するものであり、それなら旅行記とは自伝というジャンルのひとつのサブジャンルだということにもなる。

この場では「旅を書くこと」について、自分の体験から考えてみたい。20代の半ば、1年間をブラジルですごした。その経験から生まれたのが、ぼくの最初の単独の本『コロンブスの犬』（1989年）。旅行記というか「反＝旅行記」として構想され、80の断章からなっているが、その背後にはいくつかの先行テキストが隠されている。いうまでもなく、エクリチュールはレクチュールに起源をもつ。端的に言って、レヴィ＝ストロースの『悲しい熱帯』を読まなかったら、ぼくはブラジルに興味をもつただろうか。ミシェル・レリスの『成熟の年齢』を読まなかったら、ある種の気難しい誠実さをもった自伝に興味を覚えたか。そしてブレイズ・サンドラールの詩を読まなかったら、旅と詩が直接むすびついて、経験が鳥の歌のような響きをもつにいたる事態を想像しただろうか。

けれどもこれらすべての本を超えて、「旅をどう書くか」を教えてくれたのは、サンパウロで出会ったある1冊の本だった。Gilles Lapouge (1923-) の *Equinoxiales* (1977) だ。この本を携えてブラジル各地を旅するうちに、これが旅の書き方か、という啓示を得たように思う。特異な本だ。若いころの3年間、彼はジャーナリストとしてブラジルに住んだ。長い不在ののち、25年後に、ブラジルを再訪し3か月をかけてブラジル各地をまわる。これはその旅行記だが、ふたつに折り重ねられた時を訪ねながら、彼はブラジルの特質を問い、自分にとってのブラジル体験の意味を考える。ぶっきらぼうな飾

り気のない文体で、ふらふらと歩き偶然の出会いに身をまかせ、そこで知ったこと、考えたことを記す。ラプージュ自身はこう記す。「しかしぼくは、ぼくが会うことができたと思っているあらゆるブラジルをそのままに保存し、混乱をうけいれ、乱雑なままのかたちでそれらをきみにひきわたすことのほうを選ぶ」と。さまよいと探求がひとつであるような彼のスタイルは、断片的であり、紆余曲折にみちている。

そんなスタイルには、詩と呼ばれるジャンルとの親和性があるようだ。ストーリーにしたがって何かを把握し理解するのではなく、偶然の出会いによって与えられる形象やイメージをそのまま受けとめる。意味を求める以上に、イメージの強さや事物の並びの独特さに目をむける。ストレンジグラフィの「ストレンジ」の部分はずっと自分の中に保持することで、自分自身の内側にある種の距離を作り出すのだ。この「距離」とは、時間的にも空間的にも遠い物をいきいきと現前させることの逆説的な表現であり、つまりは「心がここにはない」という状態を積極的に作り出すことであり、想像力により「いまここ」を二重化、多重化してゆくことの別の言い方でもある。あらゆる本は別の人によって書き換えられ、ページの風景が延長されてゆくことを望んでいる。その意味で、ぼくの『コロンプスの犬』はラプージュの『赤道地帯』の延長であり、本と本が並ぶストレンジな風景において隣り合った位置をしめたまま、大洋の中の浮島のような漂流をつづけている。

(すが けいじろう 明治大学教授)